

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新 知 人 温 故

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2025.12 Vol.47

令和7年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中央区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

昭和五年
静岡県御巡幸記録 ——— ①

■図書館散歩

図書室副室長の時代 ——— ②

文化政策学科 准教授
野島 那津子

本が、僕たちに日々の気づきを
与えてくれるもの ——— ③

— 3つの視点から —

デザイン学科 教授
植田 道則

■特集

わたしの1冊 ——— ④
～おすすめの本を紹介します～

■図書館ニュース

シリーズ展示
「サイエンスとデザイン」 — ⑤



昭和五年静岡県御巡幸記録（表紙、背）



浜松市（五月三十日）奉迎門通御

昭和五年静岡県御巡幸記録

静岡縣編纂

[静岡縣] 1931.5

貴重書庫 [288.48/Sh 94]

静岡市駿河区谷田にある静岡県立中央図書館は、2025年4月に創立100周年を迎えました。同館は、1925年に「静岡県立葵文庫」として開館しました。5年後の1930年5月28日には、昭和天皇が葵文庫に行幸され、稀覯書等を天覧されました。今回は、その時の記録も掲載されている静岡縣編纂『昭和五年静岡県御巡幸記録』をご紹介します。

行幸は天皇の御外出のことですが、目的地が複数あり、各地をまわられるときは「巡幸」と言います。本書は、昭和天皇が1930年5月28日から6月3日までの間、地方視察の一環として一週間の日程で静岡県を巡幸されたときの記録です。本書の前半は巡幸の内容が写真や地図で紹介され、後半は文書の形式でまとめられています。今から約100年前の静岡県を記録した、貴重な資料です。

1930年の静岡県御巡幸では、5月28日に静岡駅に到着されてから6月3日に三島駅を出発されるまでの間、県内の各地を巡られました。具体的な目的地として、葵文庫のほか、静岡県庁、静岡高等学校、静岡浅間神社、清水港、焼津海岸、大井川橋、大日本報徳社、浜松高等工業学校、日本楽器製造株式会社、浜名湖、弁天島、井伊谷宮、天城山八丁池、浄蓮の滝、三嶋大社などが記されています。また、歩兵第34聯隊、静岡御親閲場（静岡練兵場）、高射砲第1聯隊練兵場といった軍関係の施設も挙げられています。

5月30日の浜松行在所での記録には「御少憩の後ベランダに出でさせられ、濱松名物の風揚とて大小四十に餘る繪風の御座所に近き大空に、特有の唸りをあぐる光景をご覧遊ばさる」とあり、浜松名物の風揚げをご覧になったことが分かります。また、本誌Vol.44でご紹介した『濱松郷土讀本』でもこの行幸が取り上げられ「千載一遇の光榮に浴したる我等市民は更に民風の作興、産業の発展、教育の振興を図り、以て宏大無辺の聖恩に対へ奉らんと固く心に誓ひぬ」と結んでいます。

参考文献：

静岡県立中央図書館編『文化の丘：静岡県立中央図書館だより』No.377（静岡県立中央図書館、2025）
浜松市役所編『浜松市史 3』（浜松市役所、1980）



文化政策学科 准教授

野島 那津子

Nojima Natsuko

紹介した図書

ニックスルネック[著]；
大橋完太郎、居村匠[訳]
『プラットフォーム資本主義』
007.35/Sr

ヤニス・バルレファキス[著]；関美和[訳]
『テクノ封建制：デジタル空間の
領主たちが私たち農奴を支配する
とんでもなく醜くて、不公平な経済の話。』
330.4/V 43

日本図書館協会非正規雇用職員
に関する委員会[編]
『非正規雇用職員セミナー
「図書館で働く女性非正規雇用職員」
講演録』
013.1/N 71

レベッカ・ソルニット[著]；
ハーン小路恭子[訳]
『説教したがる男たち』
367.1/So 34

レベッカ・ソルニット[著]；東辻賢治郎[訳]
『私のいない部屋』
289.3/So 34

レベッカ・ソルニット[著]；高月園子[訳]
『災害ユートピア：なぜそのとき
特別な共同体が立ち上がるのか』
369.3/So 34

レベッカ・ソルニット[著]；東辻賢治郎[訳]
『ウォークス：歩くことの精神史』
361.04/So 34

イヴ・K・セジウィック[著]；
上原早苗、亀澤美由紀[訳]
『男同士の絆：イギリス文学と
ホモソーシャルな欲望』
930.25/Se 14

ケイト・マン[著]；小川芳範[訳]
『ひれふせ、女たち：
ミンジニーの論理』
367.1/Ma 45

池田緑[編著]；江原由美子（ほか）[著]
『日本社会とポジショナリティ：
沖縄と日本との関係、多文化社会化、
ジェンダーの領域からみえるもの』
361.3/I 32

今村仁司[著]
『暴力のオントロジー』
361.3/I 44

図書室副室長の時代

私はかつて、図書室の副室長だった。

初めて専任教員（任期付）になったとき、私の身分は「講座助教（図書助教）」だった。講座助教は講座の仕事をするが、図書助教は何をするのか。私が所属していた研究科には図書室があり、図書助教はその図書管理業務を負うとされ、着任と同時に図書室副室長に任命された。どういう経緯で講座助教が図書室の仕事もするようになったのかは不明だが、とにかく「二足の草鞋」を履くことになった。

図書管理業務は幅広く、貸出・返却対応、実査、利用者調査等を講座助教の仕事の合間に行った。その中には、エルゼビア調査も含まれていた。エルゼビアとは、研究者の多くが利用する世界三大学術出版社の一つであり、高額な購読料で知られる。エルゼビア社の電子ジャーナルにアクセスできるかどうかで研究の分かれ目が生じると言っても過言ではない。契約が必要なタイトルを教員に確認するのが、図書助教の役目だった。この頃から、エルゼビアに代表されるプラットフォーム資本主義に違和感を覚えるようになった。情報を囲い込んで利用者からアクセス料を徴収する企業が寡占し、莫大な利益を上げる事態に疑問を抱かずにはいられない。とはいえ、こうしたプラットフォームを利用するか否かは、もはや私たちには選択できないところまで来ていることについては、『プラットフォーム資本主義』や『テクノ封建制』に詳しい。

助教時代は色々な意味で忘れたい出来事が多かったが、そのうちの一つに大阪府北部地震がある。2018年6月18日に発生したこの地震は、マグニチュード6.1、最大震度6弱を記録した。出勤前に自宅で被災した私は、家族の無事を確認した後、急いで職場に向かった。研究室は無人だった。図書室に入ると、大量の書物が本棚から飛び出し、床一面に散乱していた。終日閉室にし、職員の方と二人で本を黙々と棚に戻した。余震に怯えながら、任期付雇用の女性二人で作業したこの日を忘れたことはない。

大規模な災害がある度に、図書館では人知れず整理や修繕作業に従事する職員の方がおり、その方たちのおかげで、知を享受する空間が守られているのだと感じる。ふだん当たり前だと思っている施設、サービス、それらを含めた空間は、誰かの労働、誰かの貴重な時間の投入によって成り立っている。わが国では図書館職員のお大半が非正規雇用の女性であり（『非正規雇用職員セミナー「図書館で働く女性非正規雇用職員」講演録』）、劣悪な条件で働く人も多いが、どれほどの利用者が図書館職員の待遇について考えたことがあるだろうか。大阪府北部地震は、「見えない労働」を、誰が、どのような条件で担っているのかを深く考える契機となった。

副室長時代に読んだ本でとくに印象に残ったのは、レベッカ・ソルニットの『説教したがる男たち』である。ソルニットは、マンスプレイニング（マンスプ）の概念を広めるきっかけをつくった人物だ（ただし、彼女自身はこの言葉を著書で用いているわけではない）。マンスプとは、男性が女性に対して相手の知識や経験を軽視し、上から目線で説明・指導する態度を指す造語である。ある女性がパーティで自分の書いた本について話そうとしたところ、男性が「その本を知っている」と言い、内容を偉そうに説明し始めるが、それはソルニットの著書だったという冒頭の逸話が味わい深い。日常に潜むマンスプレイニングを軽やかに言語化した、胸が空く一冊だった。ソルニットは、『私のいない部屋』、『災害ユートピア』、『ウォークス』など邦訳も多く、多彩な魅力を放っている。

思えばこの頃から、フェミニズム関連の本が書齋に増えていった。大学生のとき、確かにフェミニズムに関心を抱いていたのだが、男性中心主義的な学問の世界で、無意識のうちに関心を隠すようになっていた。だが、フェミニズムへの関心を隠したところで何もないことはなかった——『男同士の絆』は固かった。フェミニズムの話題に触れない女性は「わきまえている」と見なされるが、決して「仲間」には入れてもらえない。そんな茶番に付き合う必要はないが、いまだに「忖度」をしてしまうことがある。『ひれふせ、女たち』や『日本社会とポジショナリティ』を読むと、女性がいかに「奉仕」する性として社会化され、主体化するよう促されてきたかがわかる。

副室長の任期は3年だったが、助教になる前から図書室をよく利用していた私は、ずいぶん長い間そこにいたように感じる。年季が入った建物で快適とは言い難かったが、嫌いではなかった。図書室で借りた本で忘れられないのは、今村仁司の『暴力のオントロジー』だ。社会形成に内在する暴力を鮮やかに描き出す今村の第三項排除論は、「共生」や「包摂」が皮相的にもてはやされる今こそ、読み直されるべきだろう。

ハンナ・アーレントが洞察したように、孤独とは自分自身と対話することができる状態であり、思考の営みそのものだ。それは、世界から切断された「ひとりぼっち」とは異なり、「一者の中の二者」として存在する様態である。私たちは、せわしく他者とつながることと、「一人ではない」と安堵するかもしれないが、その実、誰とも出会っていない。ふだん意識にのぼることのない他者性や差異は、内なる対話によってこそ浮かび上がる。

図書館は、私たちを孤独へと、自分自身との対話へと誘う。私が知っている図書館はそういう場だったし、これからもうそうであってほしい。



デザイン学科 教授
植田 道則
Ueda Michinori

紹介した図書

クロード・レヴィ＝ストロース[著]；
川田順造[訳]
『月の裏側：日本文化への視角』
382.1/L 57

高階秀爾[著]
『日本人にとって美しさとは何か』
702.1/Ta 54

鈴木大拙[著]；北川桃雄[訳]
『禅と日本文化』(改版)
081.1/951/75

土倉梅造[監修]；森庄一郎[原著]
『吉野林業全書：
完全復刻原文・原画対照現代語訳付』
650.21/Y 92

コンラッド・タットマン[著]；熊崎実[訳]
『日本人はどのように
森をつくってきたのか』
652.1/To 73

西岡常一[著]
『木に学べ：法隆寺・薬師寺の美』
521.81/N 86

村松貞次郎[監修]
『わが国大工の
工作技術に関する研究』

稲垣栄三[著]
『日本の近代建築：その成立過程』
(上,下)
521.6/1 52/1
521.6/1 52/2

村松貞次郎[著]
『大工道具の歴史』
081/1 95/867

西澤英和[著]
『耐震木造技術の近現代史：
伝統木造家屋の合理性』
524.91/N 87

山川健一[著]
『僕らがボルシェを愛する理由』
537.92/Y 27

本が、僕たちに日々の気づきを与えてくれるもの — 3つの視点から —

この大学に赴任したのが2021年。デザイン中心の実務職から180度以上の転職で、研究教育に携わるものとして、①人材育成、②社会貢献、③そして依り代・柱として研究を、大切に、日々過ごしています。大学教員ともなると「最低でも年間50冊、通常は年間150冊以上の本を読むなければならない」と言われる方も居られる中、僕自身、まだその域には達しておらず、その意味では、研究教育に従事する者の読書体験というよりは、もう少し幅を広げて読書の楽しみを共有できる機会になればと思い、この文章を綴りました。とはいうものの何か選定の視点がないと、「意味わからん」の聲が聞こえてきそうなので、上の三つに視点に因んだものを選びました。参考にいただければ、幸いです。

① クロード・レヴィ＝ストロース著、川田順造訳『月の裏側：日本文化への視角』（中央公論新社, 2014）

— これからの社会で活躍する人達へ、世界の中で自分たちの立ち位置を考える上で —

普通の授業の中で、学生らと「日本の美意識」について考える機会が多いのですが、これについて対話すると、多くの人が今日における「変わりゆく日本の美意識」について強い関心を寄せていることに気づかれます。僕たちが生きている世界は、紛れもなく、明治以降の西洋化・近代化の流れを受けた時代に生きているのは確かなことで、日本の美意識はこれからどのように変わっていくのかを考えることは今を生きる人にとって大きなテーマだと思います。この本は、世界の中で自分の立ち位置を考える切っ掛けにもなるもので20世紀を代表する人類学者の捉えた日本文化、日本の歴史と神話や童話との親密な関係、地勢の影響を受けてきた日本の多様性の存在、明治維新の解釈についてが書かれており、翻訳も上手で、判りやすく読みやすい一冊となっていると思います。

関連図書：『日本人にとって美しさとは何か』、『禅と日本文化』

② 土倉梅造監修、森庄一郎[原著]『吉野林業全書：完全復刻原文・原画対照現代語訳付』（日本林業調査会, 1983）

— 日本の木材産業創成期に書かれた植林技術の書、日本三大自然人工美林天竜材の礎へ —

研究室から北の方向を見れば青々と茂る天竜の森の様子は、今、ここで学ぶ幸せを感じさせます。木材の生産地と消費地が同じ行政区にある静岡県・浜松市は、類まれな地域です。ところが江戸時代、日本の森林面積は国土の30%、ほぼ禿山状態でした。明治の初めに金原明善らの治水事業をはじめ、近年における浜松市の森林林業ビジョンの策定等先達の力は多大なものがありました。この本は、木肌が美しく、大径木、長物の天竜材の特長を生み出した植林の技術書で、天竜材のみならず日本の森林経済の礎となったものです。タイトルに、「吉野」とありますが、天竜で実施されている間隔を空けて行う植林はこの本に描かれた地域ごとの植林の在り方によるものだと言われています。その他木材の利用方法、木材の流通や見積の方法に至る隅々に至るまでの注意事項が、視覚的にも楽しく生き生きとした手書きスケッチとともに描かれていて、著者の技術者としてのロマンや情熱を感じさせる書物となっています。

関連図書：『日本人はどのように森をつくってきたのか』、『木に学べ：法隆寺・薬師寺の美』

③ 村松貞次郎監修『わが国大工の工作技術に関する研究』（労働科学研究所, 1984）

— 日本の技術やモノづくりに存在した“第二義的目的の存在について” —

今日において、日本の技術やモノづくりを、もう一度立て直す必要があります。僕が専門とする建築の分野においても盛んに議論がなされています。日本の建築生産の歩みの中で、大工職人たちは江戸時代まで設計と施工の両方を受け持っていた人々でした。彼らのモノづくりに対する「ひた向きさ」がなければ、世界でも類をみない日本の建築技術は、存在しなかったのではないのでしょうか。僕自身の研究主題である「感覚的領分」の源流とするものです。この本は、労働科学研究所の所員であった黒川一夫氏が、終戦前後の大変な時期に、大工道具を切り口に、実証的な立場から調査研究を行ったものを、後年、村松貞次郎先生が監修され発刊された名著です。そこでは「大工が道具を用い材料を加工する技術に対し、単なる目的達成のためだけでなく、知的で創造的なものに近い意識の存在」について言及されています。この本が示唆するものは、大工技術だけでなく、プロダクト・工芸、アート、絵画や彫刻に至るすべての日本のモノづくりや芸術文化に至るまで、「どこまでも美しいものを求めよう」とする愚直なまでの誠実な姿が浮かび上がってきて、僕たちに勇気を与えてくれるものとなっています。

関連図書：『日本の近代建築：その成立過程』（上,下）、『大工道具の歴史』、『耐震木造技術の近現代史：伝統木造家屋の合理性』

日常の研鑽として必要となる読書ですが、僕の場合は、圧倒的な読書量があるものではありません。敢えて言うならば、ONとOFFみたいなものはあるのかなと思っています。OFFの時に読んだ最近の本では山川健一著『僕らがボルシェを愛する理由』（東京書籍, 1991）は、夢を育む61歳にとっては、別の意味で、生活を豊かにしてくれた良薬です。

特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

『ツナグ』 (新潮文庫)

辻村深月 [著]
新潮社, 2012.9
[913.6/Ts 44]



「人生で一度だけ、亡くなった人に会えるとしたらあなたは どうしますか？」

突然ではありますが、これは、私の紹介する辻村深月さんの『ツナグ』と深く関わる問いかけです。みなさんにも一度、この問いについて考えてみてほしいです。

『ツナグ』は、2012年に松坂桃李さんと樹木希林さんをメインキャストとして映画化されました。当時、テレビで放送された際に見た記憶が今でも残っており、それがこの本を手取るきっかけとなりました。私は「人の生と死」について書かれた本を読むのはつらくなってしまうため、あまり得意ではありませんでした。ですが、読み終えた今、『ツナグ』は、自分の人生や周りの人たちとの関わり方について考えさせてくれる大切な一冊であり、もう一度読み返したい作品だと言えます。

この本では、「一生で会える死者は一人だけ」「亡くなってから会える生者は一人だけ」というルールのもと、「使者（ツナグ）」という仲介人を通して、依頼人は一晩だけ死者と再会することができます。いなくなってしまった人に会いたい5人の依頼人が、それぞれ複雑な思いを抱えながら使者（ツナグ）のもとを訪れ、再会を通してその後の人生を歩みだす様子が描かれています。

どの章も印象的でしたが、特に心に残ったのは、「再会が必ずしも幸せな結末をもたらすとは限らない」という点です。「一度きりの再会」で何を伝えればよいのか、どのように過ごせばよいのか正解はだれにもわかりません。ですが、「一生に一度だけ」という限られた機会の中で誰に会うのかを決断し、互いに再会を望んでその瞬間が実現することは奇跡に近い出来事だと感じました。

私たちが生きるこの世界に『ツナグ』のような出来事が存在するのかわかりません。ですが、私がこの本を読んで言えることは一日一日を後悔のないよう過ごし、周りの人との時間を大切にすること、そして伝えたい思いは素直に伝えることだと思います。

『ツナグ』は、読む年齢や状況によって感じ方や感想が変わる作品だと思います。今の自分について考えるきっかけとして、ぜひお手にとってみてください。

【文化政策学部 国際文化学科 2年 小堺 麻衣】

幼い頃、父の会社のスキーツアーに毎年参加していました。いつもなら寝ているような変な時間に深夜バスに乗ってお菓子も食べて、非日常的なこのイベントが私はすごく好きでした。車内の明かりが消えてバスの中が静かになった後、まだワクワクが収まらなかった私はカーテンと窓の間に顔を突っ込んでこの『精霊の守り人』を見ていました。見知らぬ土地の景色と冬特有のシンとして澄んだ空気がこの作品の世界観ととても合っていたなと今になって思います。

この作品にふれていると当時のことを思い出して、とても懐かしく穏やかで優しい気持ちになることができます。依存できるものがあって良かったなと思います。そういうものをたくさん持っておきたいです。

私は本を最後まで読み切ることが苦手です。なので本を読むことにも苦手意識があるのですが、『精霊の守り人』は私が夢中になって読んだ作品のうちの一つです。これまで読んできた作品のいくつかは登場人物に惹かれて読んでいたと思います。口数が少なく冷たい口調で近寄り難い印象を持つけれど心根は優しくなぜか動物や子供などに好かれるような人、そんな人物が多かったように思います。この作品の主人公であるバルサもそういう人な気がします。

好みの作品に出会えた時は決まって、作品の終盤に差し掛かると、読み終えた後のことが頭にちらついて少し憂鬱になります。この作品は守り人シリーズとして続編が出ているので暫くは安心できます。話のあらすじや感想を言葉にすると私の力量では軽くなってしまうので、未読の方はぜひ読んで体感してみてください。

最近韓国文学に興味があって、私の人物癖や作品の好みに共感してくださった方には少し刺激が強めではあるかもしれませんがキム・オンスの『設計者』もおすすめです。

【文化政策学部 文化政策学科 3年 武野 天音】

『精霊の守り人』

上橋菜穂子 [著]
偕成社, 1996.7
[913.6/U 36]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

いま私は日本の伝統的な人形劇である文楽に興味を持っています。浜松は文楽の本場の関西に近いので、時間を見つけては大阪の国立文楽劇場に通っています。

そんな私がおすすめしたいのが本書です。本書は、日本に来て文楽に惚れ、義太夫の弟子にまでなったフランス人の著者が、自身の文楽についての考えをまとめたものです。

本書で興味深いのは、著者がその豊かな西洋演劇についての知識のもと、文楽という人形劇の特殊性、その可能性を検証している点です。

著者は、幾つもの次元に区分けされた複層的な舞台空間を、人に支えられた人形が地に足もつげず浮遊する文楽の演出には、一点を中心に遠近法で風景をリアルに再現する西洋演劇の舞台美術にはない独特の自律性があると述べています（18頁）。また太夫という語り手が、さまざまな登場人物、動物、森の音のような自然現象まで一人で演じ、身振り手振りで表す演技形式は、一人の俳優が一人の人物のみ演じ、個々の人間の心理を言葉によって表現する西洋演技の限界を示唆するとも言っています（35頁）。

文楽人形についての考察もユニークです。著者は文楽に身体が切断される場面が多いと指摘し（78頁、『仮名手本忠臣蔵』の塩治判官切腹の段は有名です）、そこで切り落とされる人形の一部分を、人間の「枠を超える身体」「身体的限界を打ち破る身体」（86頁）と呼んでいます。生身の俳優の身体ではなくモノであるからこそ、通常の演劇では表しにくい人間の「狂乱」（87頁）、本能的残酷さを表しえたと言うのです。

世界にはいろんな演劇があります。しかしある国、ある地域に住み、その演劇や芸術ばかり見ていると、それらが当たり前になります。一つの芸術を深く知ること大事ですが、少し普段見ているものとは異なる場所の芸術、作品を見てみると、視野が大きく広がることもあります。

本書は、そんないろいろな場所の芸術を見比べる楽しさを教えてくれるまたとない一冊だと思います。

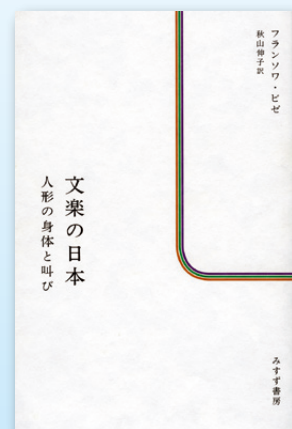
【文化政策学部 芸術文化学科 講師 田ノ口 誠悟】

『文楽の日本：人形の身体と叫び』

フランソワ・ビゼ[著]；秋山伸子[訳]

みすず書房、2016.2

[777.1/B 49]



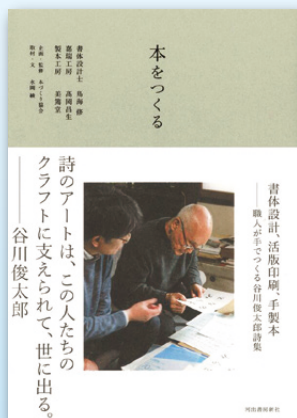
『本をつくる：書体設計、活版印刷、手製本：職人が手につくる 谷川俊太郎詩集』

鳥海修，高岡昌生，美篤堂[著]；

永岡綾[取材・文]

河出書房新社、2019.2

[O22/To 67]



この書籍は、谷川俊太郎さんの詩集『私たちの文字』を制作した工程のすべてをまとめたものです。その詩集は、通常の編集デザインや造本とは大きく異なる方法で作られました。はじめに、Apple社製品のOSに使用されている書体「ヒラギノ」や「游」シリーズの作者である書体設計士の鳥海修さんが、谷川俊太郎さんの詩を表現するために「朝靄」という表情豊かな書体を設計しました。それを受けて、今度は谷川さんが言葉を紡ぎ、『私たちの文字』が生まれます。そして、古き良き時代の技術でもある活版で印刷したうえで、一つ一つとても丁寧に手製本した特装の詩集でした。すべての表現や工程に一切の妥協がなく、関わった方々の美意識が余すところなく表現されたその詩集を手にとって見開いた瞬間に、寒気がしたことを今でもよく覚えています。

「詩」を組むために、その世界観にふさわしい「字」を一から作ることは、例えば、誰かに料理を振る舞おうと思ったときに、商店で食材を調達するのではなく、種籾からお米を育てるようなものです。その途方もないプロセスを経たデザインは、見慣れたものとは異なる「雰囲気」をまとっていました。その詩集がもつ圧倒的な美しさの理由が、その工程が詳しく記されたこの書籍『本をつくる』を読むことで、ほんの少しだけ知ることができたと感じました。

現在では、制作方法が高度にデジタル化し、日々慌ただしくイメージが消費されているグラフィックデザイン業界において、この詩集の手工芸的な手法や贅沢なプロセスを求めることは不可能に近いことだと理解しながらも、私自身、この詩集に近いことを自らの表現に取り入れることの模索を始めました。また、ものづくりのプロセスを妥協せずに、どれだけ真摯に向き合えるか。姿勢がプロセスとなり、プロセスが美意識につながり、誰かの感性に届く。日々の多忙なデザイン業務に流されるままに、安易なグラフィックデザインを作り出していた自分を強く戒めるきっかけになった書籍でした。

【デザイン学部 デザイン学科 講師 倉澤 洋輝】

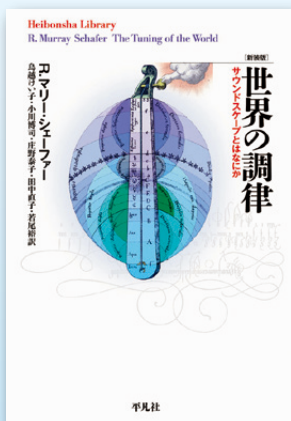
『世界の調律：
サウンドスケープとはなにか』
(新装版)

R. マリー・シェーファー [著];

鳥越けい子 (ほか) [訳]

平凡社, 2022.1

[761.13/Sc 1]



音楽大学に入学した最初の年、私が所属した専攻の必修科目の教科書として指定されていたのがマリー・シェーファーの『世界の調律』でした。音楽創作を学ぶ場で、なぜ楽器の調律に関する専門書が指定されたのだらうと困惑したのですが、本書は楽器ではなく「世界そのものを調律する」という大胆な視座を提示するものでした。音楽の専門領域に限らず、環境や都市空間における音の役割に関心をもつ読者にとって示唆に富む内容となっています。

著者のシェーファーはカナダの作曲家であり、1977年に刊行された原著 *The Tuning of the World* では、音を媒介に人間と環境の関係性を再考する理論的基盤として「サウンドスケープ」という概念を提唱しました。彼は、産業化以降の社会において機械音や都市騒音が支配的となり、人々の聴覚的感受性が低下していると批判的に論じます。そのうえで、私たちを取り巻く音環境を一種の音楽的テクスチャとして捉え直し、それを望ましい状態へと「調律」する必要性を主張します。また、ジョン・ケージによる「音楽は音であり、コンサートホールの内外を問わず、われわれを取り巻く音である」という言葉を引きつつ、芸術実践と環境認識を結びつける枠組みを提案しています。

一方で、私が研究対象としているフランスの作曲家リュック・フェラーリは、その作品がしばしばサウンドスケープ論と関連づけられるにもかかわらず、この用語に対して慎重な態度を表していました。来日時のインタビューでフェラーリは「夜中に道路工事の音で目が覚めたが、その音は非常に美しかった」と語っており、環境音へのより直感的かつ美的なアプローチを示しています。都市の騒音も自然の響きも等価に扱うその姿勢は、シェーファーの批評的かつ構築的な見方とは異なるものの、日常の音を創造の素材として扱うという点で興味深い対照をなしています。こうした両者の考え方は、いずれも私自身の音をめぐる研究の根底にあります。『世界の調律』は、音を通して世界を捉え直すための思考を、現代の私たちに改めて問いかける重要な書物です。

【デザイン学部 デザイン学科 講師 佐藤 亜矢子】

いま（2025年9月末執筆）、偶然、浜松にある大学の図書館で手にした際に、もっともロマンティックな体験ができるのはどの本か、といった観点で選びました。

タイトルが示すように、本書はそのような印象とは真逆の重苦しい政治的内容について書かれたものです。オーストラリアの多文化主義政策に関する研究書ですが、この政策に対して賛成か反対を表明するような、よくある形骸化したリベラル側と保守側に分断された二元論的な批判を行うものではありません。本書では、一見敵対関係にある多文化主義者も排外主義者も、実は同様の「白人性」を幻想する似た者同士であることが明らかにされ、これにしがみつけないマジョリティの惨めさが終始皮肉を多用した表現で理論書とは思えないほど面白可笑しく描写されています。声を出して笑ってしまうほどなので、テスト期間中の館内で読む際には注意が必要かもしれません。

しかし、本書で繰り返される「白人性」を「日本人性」（本書に登場するこの表現すら現在では差別的である可能性がある）、例えば「静岡文化芸術大学の学生性」などを用いる必要があるかもしれない）と置換することによって、途端に笑い話ではなくなるでしょう。読んだ人間の抱くイデオロギーによっては憤りを覚えるかもしれません。これまで当然のものと思っていた自身のアイデンティティの脆弱さに気づくはず。私は、そのような視点の急激な揺らぎこそが、ロマンティックな経験だと思うのです。浜松は多文化主義、移民政策における特異なロールモデルとして注目を集め続けている都市です。普段見ていた近隣の何気ない光景も、本書の読後には違った見え方になるかもしれません。

長文が苦手な方には、日本語版に追加された序論だけでも読んでいただきたいです。該当部分は今世紀初頭に書かれたものですが、現在の日本の状況が驚くべき正確さで予言されています。

【デザイン学部 デザイン学科 助教 遠藤 祐輔】

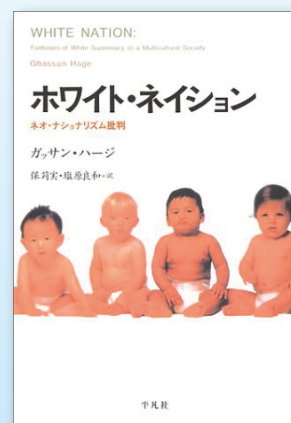
『ホワイト・ネイション：
ネオ・ナショナリズム批判』

ガッサン・ハージ [著];

保岡実, 塩原良和 [訳]

平凡社, 2003.8

[316.871/H 12]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

日系ブラジル移民に強い興味を持つ学生として、フェルナンド・モライスの“Corações Sujos”（汚れた心）はとても印象に残る一冊でした。この本は、私が留学でブラジルを訪れた際に叔母からすすめられたもので、戦後のブラジル日系社会で実際に起きていた出来事を知り、驚きながら読み進めました。

当時、日本が第二次世界大戦に敗れたことを受け入れた日系人たちは、「負けた」と口にしただけで命を狙われることがあったそうです。ブラジルにはシンドー・レンメイという日本人の秘密組織が存在し、日本の敗戦を認めた人たちの「心が汚れた者=corações sujos」と呼び、処刑リストに載せていました。日本人が日本人を殺すという信じがたい事件がブラジルで起きていたことに、私は深い衝撃を受けました。

この本は、その組織がどのように誕生し、当時のブラジル日系社会で何が起きていたのかを、さまざまなエピソードとともに、写真を交えて詳しく説明しています。本の中では多くの死者、数千人規模の逮捕、そして社会全体の混乱が語られています。著者フェルナンド・モライスの綿密な調査に基づく実証的な書き方は、歴史の重さをしっかりと伝えていて感じました。

“Corações Sujos”は悲しく重い内容の本でしたが、「忘れられた」歴史を知ることができ、日系人同士との複雑な関係だけでなく、同時に、信念、フェイクニュースや思い込みが、社会にどれほど大きな影響を及ぼすのかも実感しました。私にとってこの本は、自分のルーツと研究につながる特別な一冊です。過去を知ることは、今の世界を見つめ直すためにもとても大切だと改めて感じました。

【大学院 文化政策研究科 2年 相川 ヌビア サオリ】

“Corações sujos : a história da Shindo Renmei”

Fernando Morais
Companhia das Letras, 2011
334.462/Mo 41



『代謝建築論：か・かた・かたち』（復刻版）

菊竹清訓 [著]
彰国社, 2008.4
[520.4/Ki 29]



本書は、建築を固定的な完成物ではなく、社会や時間、環境の変化に応答して成長し続ける存在として捉え直した一冊です。著者の菊竹清訓（1928～2011）は、黒川紀章らとともに「メタボリズム・グループ」を結成し、生物の新陳代謝のように建築や都市を更新可能なシステムとして捉える「代謝建築」を提唱しました。その思想の根幹をなすのが、本書で展開される「か・かた・かたち」という理論です。

この理論は、建築を認識し実践するための三段階の構造を示しています。「か」は構想や原理の段階、「かた」は技術や法則といった方法の段階、「かたち」は感覚や形態の段階を指します。さらに、認識のプロセス（かたち→かた→か）は現象から原理へと向かう帰納的思考であり、実践のプロセス（か→かた→かたち）は構想から形へと展開する演繹的思考として整理されています。この二つの思考を往復することは、思考と実践を循環させる行為であり、デザインの本質を解き明かした理論として読むことができます。

菊竹はこうした理論を明快に語り、建築設計における思考の筋道を整理して見せますが、その一方で、実際の作品には理論を超えた複雑な感覚や直観が息づいています。スカイハウスや出雲大社庁舎などの建築には、環境や時間、人の営みに対する繊細な応答が見られ、理論で説明しきれない豊かさが立ち上がります。読み解きやすい理論を提示した人が、同時にそれでは語り尽くせない建築をつくり出している——その矛盾のような関係に、菊竹清訓という設計者の深い思考が表れています。

さまざまな人を巻き込み、責任を持って一つの空間をつくり出す設計者として、私は人々に伝わりやすく、その魅力を正確に届けられる建築を設計していけるようになりたいという思いとともに、何度もこの本を読み返しています。建築設計やデザインを行う上で、自身は何を核に据えているのかを改めて考え直すうえでも、非常に参考になる一冊です。

【大学院 デザイン研究科 1年 酒井 駿太】

シリーズ展示「サイエンスとデザイン」

本学の学生に「科学」（サイエンス）への興味や関心を深めてもらう試みとして、本学デザイン学部の的場ひろし教授（元・図書館・情報センター長）を中心に企画・構成を行い、館内の展示スペースに於いて「サイエンスとデザイン」のシリーズ展示を開催しています。第1回から第4回の内容は、本誌Vol. 44でご紹介しました。今回は、その続編です。

このシリーズ展示では、複雑で難しいと思われがちな内容について、図やイラストを豊富に交えて解説した大型図表によって、分かりやすく伝えています。また、図表のそばには関連する書籍が配置され、理解をより深められるようになっています。

【第5回】「みんなの電話」（2025年3月）

図書館・情報センターの展示スペースと本学ギャラリーを会場に、「体験型の展示」「電話に関連する書籍の展示」「電話の歴史に関する図表の展示」の3つの要素で構成。電話の歴史について、プロダクト、使い勝手（UI/UX）、建築など、様々な方向から紹介。大型図表では、電話を構成する電話機、交換機、伝送路の3つの観点で、歴史をまとめて解説。2名の講師をお招きしてミニレクチャーも開催。

[企画・構成]

的場 ひろし（静岡文化芸術大学 デザイン学科 教授）

かわ こうせい（同教授）

西山 雄大（同特任助手）

[監修、ミニレクチャー講師]

大賀 寿郎（芝浦工業大学名誉教授、元 日本電信電話公社電気通信研究所）

[協力]

NTT技術史料館

門司電気通信レトロ館

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 修了）



【第5回】大型図表と関連図書



【第5回】ミニレクチャー

【第6回】「時と場所を考えなさい」（2025年10月）

図書館・情報センターの展示スペースと本学ギャラリーを会場に、現在の時間を知るための技術と、自分の位置を知るための技術における情報の流れについて、さまざまな観点から紹介。現代と1960年代頃の2つの視点で比較した大型図表による解説のほか、絵本や地図、カレンダー、デジタル時計などの本学学生制作作品を十数点展示。外部から講師2名をお招きした特別講演や、参加者が位置情報に基づきガーデンライトで広場に図案を描くワークショップも開催。

[企画・構成]

的場 ひろし（静岡文化芸術大学 デザイン学科 教授）

かわ こうせい（同教授）

小川 直茂（同准教授）

松江 幸子（同准教授）

[協力]

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構

静岡放送株式会社

ESRIジャパン株式会社

シチズン時計株式会社

遠州鉄道株式会社

株式会社島津製作所

遠鉄タクシー株式会社

国立研究開発法人情報通信研究機構

岐阜かかみがはら航空宇宙博物館

セイコーソリューションズ株式会社

静岡大学情報学部 木谷友哉教授研究室

浜松市役所

[特別講演 講師]

五味 俊弘（ESRIジャパン株式会社 事業開発グループ部長）

花土 ゆう子（前 情報通信研究機構 電磁波研究所 電磁波標準研究センター長）

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 修了）



【第6回】大型図表と関連図書、デジタル時計



【第6回】ワークショップ「秋の花火」

※協力者の敬称は省略させていただきました。
※協力者の肩書は、開催当時のものです。